

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	費 暁 東
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知 —語彙表象と概念表象からなる心内辞書モデルを枠組みとして—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査            教 授            松 見   法 男</p> <p>審査委員        教 授            畑 佐   由 紀 子</p> <p>審査委員        教 授            宮 谷   真 人</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、聴覚呈示事態における日本語漢字単語の処理過程を解明し、日本語漢字単語の処理過程における心内辞書の働き方を探ることを目的とする。具体的には、中国語と日本語（以下、中日）における漢字単語の形態・音韻類似性を操作し、単語の単独呈示事態と文の先行呈示事態を用いて、聴覚呈示される日本語漢字単語の処理過程を調べる。学習者の日本語習熟度の高低や日本語の使用量の多寡による処理過程の変容も検討し、漢字単語の処理過程モデルの提案を目指す。</p> <p>論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>第1章では、聴覚呈示事態を用いる本研究の必然性を述べた上で、中国語漢字と日本語漢字の特徴、および中日2言語間における漢字の形態・音韻類似性の定義を紹介し、本研究の枠組みとなる心内辞書モデルを提示した。心内辞書の構成要素である語彙・概念表象の共有・非共有関係や、活性化の時間的順序・方向性および表象間の連結強度の観点に基づき、本研究の基礎となる説明論理を提唱した。</p> <p>第2章では、第二言語の単語認知過程に関する先行研究を概観した。表音文字を有する印欧語族の言語に関する研究、ならびに表意（表語）文字を有する中日の漢字に関する研究について、単語の呈示方法（単独呈示、文の先行呈示）と呈示モダリティ（視覚、聴覚）の視点から総合的にまとめ、本研究の研究課題を提示した。従来、視覚呈示事態に比べて聴覚呈示事態を採用する研究が少ないことを指摘し、中日の漢字研究では、印欧語族の研究とは異なり、語彙表象として形態表象と音韻表象の分離・独立性を考慮する必要があることを主張した。</p> <p>第3章では、単語の単独呈示事態を用いた3つの実験を行い、日本語漢字単語の聴覚的認知を検討した。中国国内の上級学習者（実験1）、中国国内の中級学習者（実験2）、日本留学中の上級学習者（実験3）における、語彙判断課題の正反応時間および誤答率の結果から、以下のことがわかった。聴覚呈示される日本語漢字単語では、形態類似性による促進効果と音韻類似性による抑制効果がみられること、そして、日本語習熟度の高低や日本語使用量の多寡によって処理過程が変容することが明らかとなった。呈示モダリティの違いによって、日本語漢字単語の処理過程が異なることが実証されたといえる。</p>			

第4章では、文の先行呈示事態を用いた2つの実験を行い、日本語漢字単語の聴覚的認知を検討した。実験4では中国国内の上級学習者を、また実験5では中国国内の中級学習者を対象とした。先行呈示文の高制約性条件（実験4a, 5a）と低制約性条件（実験4b, 5b）において、後続呈示されるターゲット単語の語彙判断課題での正反応時間および誤答率を分析した結果、以下のことがわかった。文の制約性が漢字単語の処理過程に及ぼす影響は、その高低によって異なること、そして、日本語習熟度の高低により、漢字単語の処理過程に現れる文の制約性の効果が異なることが明らかとなった。先行呈示文の高制約性条件では、豊富な文脈情報によって活性化される空白単語がターゲット単語と同一になる可能性が高いにもかかわらず、後続呈示されるターゲット単語の処理において、形態・音韻類似性の単独効果が消失しないという現象がみられた。学習者が日本語文を聞いて意味を処理し、文中の空白単語を推測し始めることによって、ターゲットとなる漢字単語の処理過程が、単独呈示事態における処理過程から変容することが実証されたといえる。

第5章では、実験1から実験5までのまとめを行い、視覚呈示事態と聴覚呈示事態、単語の単独呈示事態と文の先行呈示事態、表音・表意文字を有する言語のそれぞれの観点から、先行研究の結果と比較しながら総合考察を行った。各実験の結果を吟味し、本研究で設定された研究課題への回答を述べた。そして、本研究の意義、日本語教育への示唆および今後の課題を述べた。

本論文は以下の3点で高く評価できる。

1. 従来、単語の認知研究では、表音文字を有する印欧語族の言語について、単語の単独呈示事態における視覚的認知を検討するものが多くみられた。本研究では、表意文字を有する中国語と日本語について、単語の単独呈示事態と文の先行呈示事態の両方を採用し、漢字単語の聴覚的認知を検討した。
2. 漢字単語の形態・音韻類似性の相互作用を考慮しつつ、語彙判断課題の正反応時間を指標として処理過程を説明・解釈する際の共通論理を提唱した。その論理の基で、日本語習熟度の高低や日本語使用量の多寡、文脈情報の影響の有無という観点から、上級と中級の日本語学習者が有する日本語漢字単語の処理過程モデルを提案した。
3. 文の先行呈示事態における日本語漢字単語の聴覚的認知を検討する際の、新たな分析・考察の視点を提供した。単語の単独呈示事態での実験で得られた知見が文の先行呈示事態での実験結果に応用できるか否かを論じ、第二言語としての日本語文における漢字単語の処理研究への示唆を導出した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年2月18日